

映画『西部戦線異状なし』 1930年

原作：エーリッヒ・レマルク

*第一次世界大戦を描いた映画。アカデミー賞受賞。

レマルクはドイツ軍に参加。5度も負傷し、戦場と病院を行ったり来たりした体験を小説にした。

あらすじ

ドイツの学生ポールたちは、第一次世界大戦が始まると、学校の先生にすすめられて、軍隊に志願した。ポールたちは、短い訓練のあと、フランスと戦っている西部戦線に送られる。

「お国のために」と喜んでやってきたポールたちの気持ちは、あっという間に打ちくだかれる。一週間うちに、友達の死が続く。目をやられたベームの死、ざんごうの中で気が狂いそうになって飛び出したケムリッヒは、足を切断したのに、亡くなってしまった。

24時間、絶え間ない砲撃の中で、ポールも穴の中でフランス兵を殺し、一晩その兵隊といっしょにいた。思わずフランス兵にゆるしてほしいと泣きついてしまうが、戦争はその間も続いていた。

ポールも、ついに傷を負って病院へ。奇跡的に回復したポールは、休暇をもらって、生まれ育った町に帰る。

しかし、そこで待っていたのは、若者が消えて静まり返った町と、病気の母、そして、いまだに「戦争に行こう」と学生たちに呼びかけ続けている学校の先生だった。教室で、戦争の悲惨さを話すポールに、学生たちは「ひきょうもの」と、口々に非難するのだった。

絶望したポールは、また、戦場にもどっていく。仲間のカチンスキーもどうとう死んでしまった。

そしてポールは……。

